
櫻の夢 帰郷

素朴龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

櫻の夢 帰郷

【Nコード】

N2591BA

【作者名】

素朴龍

【あらすじ】

あの人はまだ帰ってこない。

桜ルートエンディングを改変、NORMAL要素を入れたTRUE
エンド。強いて言うならHAPPYエンド？

掲示板に投稿したものを若干加筆修正の上でこちらに投稿しました。

凜side

部屋を出て、門へ向かう。

二人きりの静かな朝食を終えて、いつも通りに通り慣れた屋敷を後にする。

「行ってらっしゃい、姉さん。あまり無茶しない様にして下さいね」

「ええ。桜こそ、あんまり無茶をしない様にね」

桜 最愛の妹 から鞆を受け取って、屋敷の門に背を向けた。

いつも通っている筈なのに、坂道は長く、何処までも続いているかの様に街へと伸び続けている。
なだらかな坂道と、いつの間にか吸い込まれてしまいそうな程に青い空。

それを見て、突如、幻視した。

何の理由もなく、哀しい昔の出来事を。

「桜」

「はい、何でしょうか、姉さん。」

「……んー、明日から春休みだって言ったたでしょ？今日は直ぐに帰

つてくるから、帰ってきたら新都にでも行かない？ちょっと相談したい事もあるしね」

「え……？街に、ですか」

「そ。春休みになったら、どこか旅行にでもいきましよう。まあ、まだ何処にいくか決めてないから、桜に決めて貰おうかなーって思ってた」

私が軽く笑うのに対して、桜は黙り込んでしまった。

それもそうか。

今の桜は決して屋敷から出ようとしない。

家の外に出る役割は、今はほぼ全て私が行っていて、桜はあの日から外に出る事がなくなってしまった。

別に、それが気に食わない、という訳じゃない。

ただ本当に、少しずつ哀しい過去に負けない為に、楽しい未来を増やそうと思ったただけだった。

「どう？ いや、桜が嫌だっけ言うんなら別に良いんだけど」

「っ、いいえ、姉さんと一緒に出来るのでしたら嬉しいです。私、楽しみにしてますね」

……目に見えて苦しそうなのを隠し、桜は私に笑いかける。

「そう。なら昼前には戻るから、着替えて待っていて。一緒に予定でも考えましょ？……もしかしたら綾子辺りがついて来るかもしれないけど、その時はその時って事で」

はい？と首をかしげる桜。

学校に行ったら、私よりもこういった事に詳しい綾子に相談する事になるんだらうけど、綾子の事だからついて来るとか言い出しかねない。

まあ、それはそれで、陸上部の三人あたりでも誘って大勢で遊びに行くのも悪くないだろう。

「それじゃあ、行って来るから。見送りありがとね、桜」

そう、区切る様に告げて、いつもの家を後にした。

道は、なだらかに街へと続いている。

私は背中に温かな桜の視線を感じながら、晴れやかな青空の下を歩いていった。

桜side

そうして、私は姉さんを送り出した。

いつも通りの日課を終えて門に手をかける。

姉さんも藤村先生も行ってしまったって、屋敷にはもう私しか居ない。

間桐家の唯一の生き残り。

兄さんも居なくなってしまうたし、家を売り払って手に入ったのは幾らかのお金。

幸いお屋敷を維持する為の費用は、全て藤村先生の実家の方が持つてくれる事になった。

お願いした所、管理は一任して下さいさるそうなので、直ぐにこのお屋敷から出て行くという事はなさそうです。

『 休みになったら、どこか旅行に行かない』

考えて、考えて、その言葉に、私は頷く事にした。

……あの日から、私はこの屋敷から外に出る事を自ら禁じていた。
あの人が、私の代わりに『アンリ・マユ（この世全ての悪）』の始末を付けたと知った時から。

ずっと、外に出る事を避けていた。

だって、そうでしょう？

あの人は私を守る為に、子供の頃からの夢だった正義の味方を捨てて、私の為に命を投げ出した。

だから私は、決して人に迷惑を掛けてはいけなかった。

誰にも迷惑を掛けずに生きていく。

大勢の人を殺めた私に、今更人との触れ合いなど許されないのだから。

私は只、ひっそりと隠れ生きていく隠者の様になれば良いと思った。
外に出れば誰かに迷惑を掛けてしまうかもしれない、なら私はこの屋敷に留まればいい。

このお屋敷に閉じ籠って、二度と誰の迷惑にもならない様にしなければいけないかった。

だってあの人が、私を守ってくれたから。

私に出来る事は、あの人の家を綺麗なままにして、いつまでも此処で待つ事だけだと思ったから。

「……でも、今日でそれも終わりにしますね。私は外に出ようと思います」

この日、私は久しぶりに、

「衛宮、士郎　　先輩　　」

今も愛している、あの人の名前を呟いた。

日課の掃除をしたり家事をこなしていると、正午に差し掛かっていった。

ちやっかり自分用に陣取ってしまった筆筒の一段から服を取り出し、外出用の服に着替えた。

……おしゃれな服を着るのはいつぶりだろう。

ふと、袖を通して背中が軽くなった事に驚いた。

あの人が居た頃からあれだけ着慣れていた服は、この服の軽さに比べるとまるで重い枷の様だった。

「　あ　」

ざあ、と風が吹いた。

髪に結ぼうと手に取っていたリボンが飛んでいく。

それは昔、何年も何年も前。

ある少女がその妹に残した、唯一の絆だった。

「待つて、それは　　」

リボンはどこまでも求んでいく。

ふわりとつむじ風に乗って、下から狙っていたかの様なタイミングで吹いた風に乗って。

あの日から育てていた花で、園芸教室も開けるのではないかという程の大きな花壇の中に、軽く落ちた。

「あ、あつた……」

見つけて、すたと腰を落とす。

これは、私のもう一つの心の支え。

これ失くして、私は今ここに存在いなかつただろう。

あの人が生きているはずはない。

だって、あの人が命を投げ出して聖杯を破壊する事が、私がこうして今までの日常に戻る唯一の方法だったから。

それを誰よりも分かっているくせに、私は姉さんと同じ様にいや、姉さんよりも尚深く、それを信じてしまっている。

「だって……まだ残ってるもの」

縁側に座り、ぼんやりと空を見上げる。

……あの人に初めて抱かれた時、あの人から魔力を分けてもらった時からずっと感じている、胸の奥の温もり。

まるで常に抱きしめてもらっているかの様な、酷く優しい温もり。その、あの人の魔力の残滓が、今だに胸に残っている。

……年月の流れたそれは、もう本当に僅かで希薄なものになってしまったけれど、確かに　まだ、残っている。

その温もりを感じるさえ難しいくらいおぼろげなものになってしまったけど、まだ残っている事　それだけは確かだった。

だから、自分自身で否定しながら、姉さんよりも藤村先生よりも、世界中の誰よりも、あの人が生きているんだって。そう、信じている。

あの人は、いつか必ず帰ってくる。

なら問題なんてないんだから、私は元の生活に戻らないといけない。

だから　　あの人の家に帰ってきた。

こうして誰もいない家に帰ってくる事も、もう当たり前になってきた。

「……思ったよりも早く、準備ついちゃったな」

ぽつんと呟いて、……姉さん達が到着するまで、少しだけ、感傷に浸る事にした。

土蔵にやってきた。

あの夜以来、一度も足を踏み入れなかった場所。

……此処には、良い思い出も悪い思い出も含めて、未練が沢山ある。あの人の家に行く様になった頃、あの人を初めて起こしにいった朝ある日、あの人が死ぬ様な危険を冒してまで魔術の鍛錬をしていたのを目撃した夜。

いつか、眠っているあの人の寝顔を、微笑みながらずっと眺めていたあの朝。

……そして、聖杯の　　間桐の呪縛から解放されて、私が目覚めたあの朝。

「……本当に、先輩はお馬鹿さんです。あれだけ私を殺してくれっ
ていったのに、結局　　」

あの人は自分を犠牲にする方法を選んだ。

いや　　あの人はそうしてしまっって、初めから分かっていた

のだ。

だからあれだけ強く約束したのに、あの人は私の言う事なんか何一つ聞いてくれなかったんだから。

「そういえば、出会った頃からそうでしたね。自分が正しいって思った事しかやらないし、許さない人だった。……いつも、他人の為に自分を犠牲にしていましたしね」

そうだ。

兄さんに殴られそうになった時も、あの人は私を庇ってくれた。

姉さんに殺されそうになった時も、身を挺して私を庇ってくれた。

そうして、私が戻れなくなってしまった時も。

頼みもしないのに勝手に……

「……………あ……………っ」

漏れそうな嗚咽を押し留める。

私は悲しんでなんかいない、寧ろ怒っているんだ。

今度という今度は、本当に頭に来た。

あの人は自分の事ばかりで、残された私の事なんかこれっぽちも考えてくれなかったんだから。

「……………本当に絶対許さないんですから」

けど、その相手が目の前にいない場合、この諸々の感情はいつたいてどこに放せばいいのだろうか。

胸に残る温もりは消えそうで、今では死んでしまった様なただの重さが残るだけで……。

「……だめ。でも　　確かなものがそれだけなんて」

そう思うと不安になってしまふ。

どんなに強がっていても、本当はもうだめなんだって、負けてしま
いそうになる。

……あの人がどこかで生きているって信じている。

胸に残る温もりは確かに残っている。

だから生きているんだって、信じたい。

でも、それはあの人が生きていて信じられると同時に、何故か、
もう生きていないんだって証拠になってしまいそうで怖い。

「　　先輩、遅いなあ……。私、もう諦めちゃいますよ……
？」

……あの人を待っている。

けど、信じ続ける事が難しい。

胸の奥に残っているあの人の魔力の残滓。

「……もう。こんな所、姉さんにでも見られたら、笑われちゃいま
す」

はあ、と息を吐いて、屋敷に戻る事にする。

待ちくたびれてしまったし、そろそろ姉さん達も到着するだろう。

と。

こつん、つま先に何か当たった。

「あれ？」

散らかっていた物に隠れて見えなかったけど、何か落ちている。

キラリ、と光に反射する金属……鉄の棒か何かだろう。
藤村先生も清掃道具をそのままにしておくなんて、危ないったら

「…………え？」

いや、違う。

気がついて、息をする事さえ忘れて、膝を落としそれを手に取った。

どくん。

心臓の鼓動音が煩い。

…………それはどんな繋がりだったんだろう。

この只の棒切れとあの人と私の間には、目に見えない特別な繋がりでもあったのか。

ただ本当に一瞬だけ、胸の奥に以前と同じ、いや、それより遥かに強く、あの人の魔力の匂いが感じられた。

「あ……………あ……………！」

ぼろぼろ、と頬に熱いものが流れる。

それが涙と気が付いても、特に拭おうとは思わなかった。

―生きてる。

それだけ。

何も考えられないし、何処にいるかなんて分からない、どうしているかなんて教えてくれない。

けど、分かった。

あの人は生きている。たった一度だけだったけれど、私は確かにあ

の人の魔力を感じて、抱きしめる事ができた。

「うううう

！」

大きく呻き、言葉を飲み込んだ。

もう、今の温もりだけでも十分だった。

例えこの先何があっても、私はずーっと信じて、あの人の帰りを待つ事が出来ると思えた。

「……っ、はい。とりあえず

これは、私が預かっておきます」

『繋がり』を収納に仕舞って、思い出の土蔵に背を向けた。

青かった空は、今はすっかり赤銅色に染まっている。

数え切れない程の思い出を詰めたこの場所に、数刻の間の別れを告げる。

だって思い出はこれからまだたくさん出来るし、私にはやるべき事がある。

感傷に耽る、なんていうのはここまでだ。

先ずは、目先の旅行をうんと楽しんでしまおう

！

春になった。

少しだけ悲しい記憶を思い返す。

『……桜。このゴタゴタが終わったなら、どこか遠くに行こう。今までどこかに遊びに行くとかなかっただろ。たまには遠出して騒ぐのも良い』

その約束は、

『 よし。じゃあ約束だ。桜の体が治って、このゴタゴタが終わったら、』

少しだけ、お先してしまいました。

行く気になれなかった学校にも復学しました。

以前までとは少し違うけど、友達も増えて、楽しい学校生活を送っています。

春になった。

私は最高学年、姉さんは卒業後ロンドンに渡って、各々の日常を取り戻しています。

離れ離れだし、連絡もあまりないけど、それは我慢。いつまでも姉さんに甘えている訳にも行きません。

当然だろう。奪ったからには責任を果たせ、桜

時々、その言葉を思い出して辛くなる。

だから私は、あの人の穴を埋めるかの様に人助けに勤しんだりもした。

あの日から育てている庭の花も、その一部を学校に寄付したりしている。

藤村先生や他の先生も喜んでくれて、少しだけ、心が豊かになった気がした。

春になった。

高校を卒業して、相変わらず奉仕活動に精を出している。

……他人が怖いのは変わらない。

毎日の様に責められる気がするけど、段々とそれにも馴れてきた。

けど守る。これから桜に問われる全ての事から桜を守るよ。

たとえそれが偽善でも、好きな相手を守り通す事を、ずっと理想に生きてきたんだから

本当に勝手だ。

言うだけ言っつて、守ってくれないのは一番性質が悪いと思う。

だから、簡単には許してあげない。

帰って来たら、散々我が儘を言っつて、私の何倍も困らせてやるんだから。

だから、早く帰っつて来て下さい。

私は今でも、貴方を愛しています。

春になった。

今年で私も成人。

時が経つのは早いけれど、相変わらずあの人は帰っつて来ない。

高校を卒業してからここを訪れる人は少なくなったが、それでも幾

らかの旧友が時偶顔を出す。

美綴先輩はその筆頭。

私を慰めてくれたり、一緒にお出掛けしたりもする。

学生時代からお世話になっていたし、すごく感謝している、良い先輩です。

あと、姉さんから時計塔への入学を誘われたけれど、今のところ行く気はない。

間桐の財産を使って、あの人が帰って来るまでこの家を管理するのが私の使命だから。

最近は、奉仕活動も何だか楽しくなってきた。

罪の意識は決して忘れてはいないけれど、辛かったり、怖かったりする心は薄れてきた。

でも、今でもあの人を愛する心は変わらない。

.....。

春になった。

今では庭の花の中に桜の木も仲間入りして、一層綺麗に咲き誇っている。

実は、春はここを花見の場所として無料で開放していたりする。

また、毎日開放している正門からは、春以外でも近所のおばさんや子供達が大勢見物に来て、とても賑やかになる。

これが『償い』になったのかは分からないけど、誰かの笑顔を見る

のはとても幸せ。
許して貰えるとは思っていないけれど、少しでも幸せを増やすのが私の生きがいです。

そんなある日。

時計塔の姉さんから連絡があった。

「あー、もしもし。久しぶりね、桜」

「はい。姉さんこそ、お元気そうで何よりです」

久方ぶりの声は、昔と変わらず透き通っていて。
何故か理由も無く涙が零れ落ちそうだった。
それを隠して、何かあったのか姉さんに問い掛ける。

「こんな私がわざわざ電話してるんだから、何かあるに決まってるでしょ」

相も変わらぬ横暴ぶりに笑みが零れる。

「何で笑ったのよ……まあ良いわ。良い知らせよ、桜。外に出てみなさい」

「？」

疑問を掲げつつも、いつもの縁側から外に出る。
手には電話の子機、靴はサンダル、そして偶然にも、服は学生時代着ていた藤村先生のお下がりだった。

「外って？」

「はい、桜！」

「あ、姉さん」

そこには数年来の姿があった。

髪はツインテールからロングになり、以前あった時よりもっと大人っぽい容姿になっている。

もっと驚きなさいよ、とむくれる姉さんを見て更に笑みを深める私。それを見て、殊更に不満気な姉さん。

ああ　懐かしいな。

「ふふっ。それで、どうしたんですか？」

「もう……ま、それは置いといて。桜、先に謝っておくわ、ごめんなさい」

唐突にペコリと頭を下げる。

顔が全く申し訳なさそうでなく、寧ろ嬉しそうなのも気になるけど。

「え？それってどういう」

「良いから良いから。さ、入ってきて！」

大きく声を上げて手招きする姉さん。

誰かが正門の蔭に隠れてみたい、全く気付かなかったけど。

軽く足音を響かせて、中に入ってくる誰か。

背格好から見るに、男の人みたいだけど誰だろう。

そこには

「あ　え　　　　!?!」

長年、待ち続けた

「一番最初に会いたかったんだけど、遠坂に見つかったってさ」
今でも、ずっと愛し続けてきた

「うあ　　、あ、あああ　　　つ!?!?!」

私だけの、正義の味方が、申し訳なさそうに

「ごめんな。そして　　ただいま、桜」

しっかり地に足をつけて、そこに立っていた。

epilogue .

「で、どういふ事?」

「どういふって、何がさ」

「どうやって帰ってきたのかって訊いてるのよ。あんなに……ボロボロだったのに」

「そうですね。あの後ライダーが探しても、先輩の体は見つからな

「かたつて言っていましたし……」

あれから暫く、私がずっと泣き続けていたので、今はもう夕方。とりあえず居間へ入り、先輩の話聞くことにした。

「ああ、俺はあの時、最後の投影で聖杯を破壊しようとした。その時――」

穏やかな顔から少し辛そうな顔に変わる。

一度区切ってから、先輩は続きを語りだした。

「イリヤが現れたんだ」

「イリヤスフィールが……？」

「あいつは　　イリヤは、命を賭して俺を救った。開きかけていた大聖杯を、命と引き換えに閉じたんだ」

ただ淡々と事実を述べていく。

あの時私と姉さんは、ライダーによって洞窟の外へ避難し、難を逃れた。

その間にイリヤさんが居たなんて……。

「死にかけの俺に第三魔法を使って、魂を肉体から離して物質として固定した、らしい」

詳しい事はよく分からないのだが、とあっけらかんに言う先輩に対し、愕然とする姉さん。

私もあまり勉強してこなかったのでよく分からなかったが、後で聞くと、第三魔法『魂の物質化』　　アインツベルンの言うところ

の『^{ヘヴンズ・ファイール}天の杯』　　は協会でも隠匿されてきた神秘中の神秘らしい。
元はアインツベルンが到達したらしいが、今は失われて　　ここ
までしか姉さんも知らないみたいだ。

「へえ、それで？」

「……何か怒ってないか？イリヤによって救われても、そのままじや俺は無力だ。イリヤが知っていたのかは今じゃ分からないが、俺は第三魔法の成功例として、アインツベルンに追われる事になった」

「え　　！？」

「大変だったぞ。武勇伝として聞かせられる程だ。……殆どセラの
だけどな」

そこからの先輩の話はアインツベルンに追われていた数年間に転換
した。

イリヤさんの命を受けたアインツベルンのホムンクルス、セラさん
は先輩が新たな体を手に入れるまでの間、本家の追っ手から身を挺
して守ったらしい。

自らの立場も顧みず、只々主人の命だけを守って。

「何だかんだ言って、あいつは良い奴だったよ。俺は口も聞けない
のに、小言を言ってくるし、事ある毎にダメ出ししてきたけど
頑なに、主人の命令を守り続けた。当の本人がもう居ないっての
にだ」

あいつには感謝してもしきれない、という先輩。
少し、羨ましい。

私は先輩に頼ってばかりだったから。

「適合した身体が見つかる、程無くセラは亡くなった。ホームクルスとしての短い寿命を酷使してまでの事だったんだろう。それが、数か月前」

「えっ、それじゃあ先輩、もっと早く帰ってこれたんじゃ……?」

つい、口に出してしまった。

こうやって少しでも人を責めるのは、私の悪い癖だと思う。

「いや、金が無くてさ。暫くの間は、体を作って貰った人が経営してる会社で働いてたんだ。『伽藍の堂』ってトコ」

「体を作って貰ったって、そのオーナーの名前、もしかして蒼崎じゃないでしょうね……?」

「ありゃ、バレたか。釘刺されてたんだがな、他言無用って」

「こいつ……」

それなら私も一度聞いた事がある。

確か、蒼崎燈子。

魔法使いとして名高いミス・ブルー、蒼崎青子の姉であり、自らは封印指定の稀代の人形師、姉妹仲は悪いを通り越して殺し合う程に最悪だと聞いている。

先輩の身体は本来のモノではなく、彼女に作って貰ったみたいだ。

「でも、良い人ばかりだったぞ。そりゃああんな人が経営してるもんだから、色んな力を持った人が集まってきたけどさ」

そこで知り合った人の事を冗談を交えながら話していく先輩。
話を聞く限り、本当にみんな良い人みたいだ。
話し終わると、次の話題が上がった。

「それにしても、運賃稼ぐだけなら直ぐだったんだけど、『身体』
の分も払わなくちゃいけないかったからな。雑事の他に少しだけ実験
に協力して、チャラにして貰ったんだ」

「「実験って……!？」」

私と姉さんの声が重なる。
今のは聞き捨てならない。

稀代の人形師、しかも封印指定の人間に身体を弄くり回されたかも
知れないのだ。
もっと詳しく、掘り下げて訊く必要がある。

「実験って言うても、そう対したもんじゃない。あの人によると
」

『何、元の肉体よりスペックを上げてやろうと言うのだ。 あ
あ、次いでに言うつと、貴様の身体に一寸ばかり興味が湧いた。その
人形にも馴染んできた頃だろうし、少し弄らせる』

「らしい」

悪びれもせず、平然と言い放つのだった。
え、何だよ？と、私と姉さんに交互に視線を合わせる先輩。

「……何て言うか、直ぐ人を信用するのがあんたらしいと言うか…
…。なーんにも変わってないわね」

「はい。先輩はなーんにも変わってません」

「む。何故か謂われのない中傷を受けた気がする」

相変わらず鈍感な先輩が、唇を尖らせる。

それを見て思わず笑ってしまう私達。

不意に、少し強い風が髪をなびかせた。

本当に、何も昔と変わらない。

「じゃ、この話は終わり！で、士郎はこれからどうするの？」

「ん、まずは藤ねえんところに行くよ。色々迷惑掛けただろうし。二人も来ないか？」

「私は家に戻るつもりだったけど、まあ良いわ。藤村先生の泣くことがみたいし」

「「ところで、桜は？」」

冬が過ぎ、春になった。

吹く風は仄かに暖かく、照り付ける日差しはこれでもかと言う程、私達に春の訪れを伝えている。

辛く寒かった冬は終わり、私達の未来を妨げるものはもう何もない。

失ったものを胸に刻み、新たに手に入れたものを胸に秘め、私達は

次へ進む。

それを忘れない様に、それを失わない様に。

この町の物語は、こうして終わりを迎えた。

新しい物語が、今か今かと私達を待っている。

さあ、まずは、あの時の約束を果たしに行こう

！

賢者達が祈念する。

“開け、天国の門、根源への路よ。我等に祝福を、知識を、奇跡を授け給え”

愚者達が懺悔する。

“閉じよ、天国の門、根源への路よ。この世全ての悪から、我等を救い給え”

こうして、千年に及ぶ悲願は幕を下ろす。

我等の夢も、希望も、全てはその起源はじまりから、禁忌なる『罪』であった。

空の星が墜ちていく。

宇宙は虚無に閉じていく。

真理に至る路は、我等の『罪』に覆われる。

私は最後に、喜びに満たされた。

全ては闇に葬り去られた。

あなたを妨げるものは、最早何もない。

あなたを苦しめるものは、最早何もない。
心煩いをする必要はない。

これで、よじやく。
。

(後書き)

新年一発目がこれでした。

とりあえず、書きたいから書いた。後悔はしていない。

自分は基本的にハッピーエンド至上主義なので、NORMALエンドに少しは救いがあってもいいんじゃないかと思ったり。

いや、別に否定してる訳じゃないです。ここ重要。

ライダー居ないのは気にしないでください。

嫌いじゃないです、気付いたら居なかっただけ。

……ごめんなさい、石投げないで！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2591ba/>

櫻の夢 帰郷

2012年1月6日17時51分発行